鹿児島県国語教育史（Ⅵ）

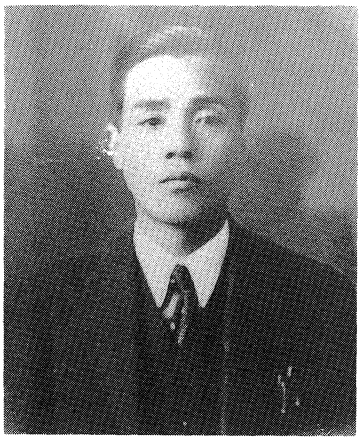
――磯長武雄研究ノート――

新名主　健一

（一九八八年十月十五日　受理）

はじめに

昭和初年代の綴方教育史の中に必ずその名を見出すことのできる磯長武雄（明治三十四年～昭和十三年　三十八歳）〈以下磯長と略す〉は、鹿児島県肝属郡根占町の出身である。



磯長武雄先生

（根占町立図書館所蔵）

没後、五〇年（昭和六十三年）ということで磯長関係の資料を収集しようと思いたった。ところが、先行研究は皆無であるし、その資料収集も困難を極めた。わずかに入手できた資料の中に「（綴方は生活のスクリューである）とは兄の不動の信念で、しかもそこには、世人の陥り易い綴方のみを營爲するといふ弊は少しもなかった。總べての教科に、總べての教育部面に、より教育的に、より人間的な營みを見せてゐた。」（「磯長兄の追憶」内田貢『驥歩』八八P～八九P所収）という部分を見つけ、単に綴方教育に功績のあった先達というばかりでなく、筆者の理想とする小学校教師の姿[注]がそこにあったということで、どうしても磯長の全貌を明らかにしたいと思ったわけである。しかしながら先行研究がないことからわかるように何分にも資料に乏しく資料収集が先決問題であった。したがって本稿は本格的研究のための基礎作業という性格のものになる。

これまで、追悼文集「驥歩」を何度も読み返し、記載事項の確認と関係づけを主として、論文の所在の確認と収集、さらに入手した論文を頼りに末見の分を探すという作業を行ってきた。すると当初は点と点でしかつなげなかった磯長の思想等が以前に較べると線に近いものになった。すばらしい教育者だった磯長の人生観・教育観等が編年的にたどれ、その屈折点も探すことができる可能性が高くなってきた。

もとより磯長の生活綴方史上における評価・意義づけはその専門家に任すとしても、筆者の関心事は現代の教師により良き教師への示唆を与えてくれるであろう磯長の教育者としての資質・生き方を探ることにある。具体的には次のことを明らかにしていくことによって目的に近づけると信じている。①　昭和初年代に磯長が県綴方教育界に於いて果たした役割　②　磯長・菊池間のいわゆる「都会的特質」論争　③　童詩論の変遷と到達点　④　歌論の変遷と到達点　⑤　綴方論の変遷と到達点　⑥　教育観と

その実践過程　⑦　エディターシップの分析　⑧　教師像　本稿は磯長の資料収集の過程でいくつかの発見もあったのでそれらを交えて記すことにする。

一

「驥歩」の検討

1・「驥歩」一Pの年譜に「大正十二年　童詩、童話の指導研究をなし鈴木三重吉氏主宰『赤い鳥』に兒童作品を投稿發表なし兒童と共に精進す。」とある。「赤い鳥」復刻版にあたってみると大正十二年には次のような七点（五点は名前のみ）が掲載されている。

一月號　九八P　豆ひきの日　姶良郡玉利小學校尋五　岩元福美・三月號　一〇五P　綴方選外佳作　鹿兒島　川畑照海・四月號　創作童話選外佳作　鹿兒島　太田久・五月號　一〇七P　自由詩選外佳作　鹿兒島　桑木野光雄・六月號　一〇六P　自由詩選外佳作　鹿兒島　河野行　山内しか　山田敏一・七月號　九三P　風　鹿兒島県女子師範學校付屬小學校尋六　村田安子

当時磯長は佐多尋常高等小訓導としてあった。歌誌「潮音」に属しよく歌会を開いたという。しかしながらこの期の磯長の綴方教育を知る手がかりは、現在のところ皆無である。この頃は全県的な、あるいは地区的な綴方の団体も設立されていない。前後の大正十一年・十三年の「赤い鳥」には鹿兒島の文字が見えないことから、この年の七点は確証はできないが何らかの関係が磯長とあったことも推測できる。たとえば、磯長と交友のあった教師の作品を磯長が投稿したとか……。磯長夫人（現川辺乙己氏）の弟である川辺盛幹氏（鹿商工事務長）によると磯長がこの期「赤い鳥」の愛読者であったことは確かである。また後で触れるが磯長はペン・ネームをいろいろ使って匿名で書く傾向があったので、それらしい名を見つけてみたが見当がつかなかった。可能性のひとつとして投稿はしたけど掲載はされなかった場合も考えられる。いずれにせよ磯長は童詩に対し一家言を持っており「赤い鳥」主宰の鈴木三重吉・選者の北原白秋の名もその論考に見えるので童詩の変遷と到達点をする中でより実証的な考察ができるであろう。

2・山下源蔵氏（〒一五五　世田谷区代田一丁目三一の四）の証言　「驥歩」八〇P～八一Pに「童詩教育發刊時代」と題する同氏の追悼文が掲載されている。その記事中の幾つかと、その他「我等の學園」について、筆者が問い合わせたことに対する返信（昭和六十三年六月八日）である。

○磯長さんの研究録「私の綴方教育大道」について――この文献ありません。この展覧会を主宰したのは「綴方教育」（日本綴方教育研究会発行）の菊池知勇氏でありますが、終戦前にこの雑誌も会も消滅し、菊池氏も戦災を浴び、昭和四七年五月八日（八十三歳）死亡されましたので、探し出すことができません。

○「我等の學園」について――市尋校は今は消滅して名山小学校がその後身ということになっているが、名校長兼子鎮雄氏のもとに六〇学級位ある大規模校で県下有数の教員を集めて理論・実践の両面で成績をあげ、県教育界の指導的地位にあることは、付小にまさるとも劣るものではなく、全国からの参観者が毎日程絶えることがなかった。磯長氏はその綴方科主任として迎えられたことにより、全国的指導者の地位につくことができた。検定出身の人であるため、県下にその面からの同志や組織が乏しく、そのことを私に期待したようであり私も自然それを担当したと思う。磯長氏を支持する人には一師範出身は少なく、検定出身・二師範出身などの方が多

かった。私のうちが薬師町島津どん屋敷の九の橋通りで、道路一つ隔てて二分位のところの原良町に磯長氏が転居して来たこともあって、この発刊編集関係のことについて、私が一番の助手になったようである。磯長氏が根占へ転じた時、発行人は外園郁也氏（吉田の人・やはり市尋校の）になった。外園氏は今なら八十五歳位かと思うが吉田に生存されているかどうか不明である。

○「『童詩教育』苦闘史は『兼子輩下』グループがこれを語るべきであろう・『最も率直に言へば今日の鹿児島の綴方界は兼子校長の理解の下に副田凱馬との對立に於いて磯長武雄の打った大芝居の成果に外ならない』『副田さんは獨立的に貢献してゐる綴方人であると共に友人中最も磯長さんに楯ついて論争した人間であるからである。』について――「童詩教育」の発行で磯長さんの消耗した心力は大変なものであったが、然も氏は市尋校綴方主任としての校務を欠くようなことは全くなく、学校の綴方教育の成績をぐんぐんあげられ、兼子校長以下幹部教員たちの信頼と尊敬を受けつつこの発行をすることができた。副田氏は人柄が常ににこやかで童謡の先生として、先生方、父兄、生徒から愛された。（副田氏の同期が岩下三四、一期後輩が武田恵喜秀、両氏ご健在であるからよくおわかりです。）私は一師の四年後輩で尊敬する先輩であったから常にかわいがってもらった。然し校内では、副田氏は常に批判的で、それを口に出して軽く言うので、上司からはきらわれた。また綴方教育については浪漫主義の立場をとり、従って当時の生活主義綴り方、科学主義綴り方（調べる綴方）には理解を示さなかったから、指導者としては抱擁力に欠けた。その点磯長氏とは対蹠的であり、校内でも、県下でも、おもしろい童話の先生であって、全国的な指導的地位はなかった。磯長氏とは月給が同じ位だったが（ということは席次も）、磯長氏の方が重きをなした。「童詩教育」の発行（創刊）についても相談はしなかったと思う。副田氏は童謡（定型のこどもの詩）の方であって、童詩には関心が薄かったのではないかと、これは私の想像である。」

※山下源蔵氏は昭和五年鹿児島第一師範卒、鹿児島尋常高等小・天保山高等小・男師付属・玉川学園・豊島師範・文部省図書局　東京都教育局に勤務。現在東京で「短歌生活」社を主宰。

3・「驥歩」扉「君の生命を繼承するもの」を執筆した田坂誠喜について

明治三十九年生まれ・昭和六十一年没　昭和四年三月国学院大学国文科卒業・同年九月高等学校高等教員（国語）免許所得　鹿児島第一師範に赴任　昭和十四年　新潟師範に転職　昭和十七年二月　生活つづり方運動のリーダーとして検挙さる　昭和二十二年　新潟大に復職　昭和二十六年青山学院大に転職昭和三十六年　青山学院大教授

昭和六十二年十月末、南郷有徳先生より田坂先生の住所を聞き、鹿児島県の国語教育史を記す上で貴重な資料があるはず（できたら田坂先生の生前におうかがいすべきであった。）と上京。未亡人田坂里子氏・（〒一八〇　武蔵野市西久保三―八―一六）を訪問。しかしながら中野より引っ越す前には確かにあった資料も引っ越してからどうしても見つからないとのこと。後日、葬儀出席者に配られた略歴と新潟東中通教会の機関紙に掲載された資料を送っていただいた。その資料は昭和十七年当時の状況をかなり正確に伝えていると思われるので紹介する。

「先生は新潟師範学校に在職中の一九四二年二月、世にいう『生活つづり方教育事件』の関連者の一人として検挙されて半年間新潟で入獄された。（略）これは戦時下の日本全国で起きたもので一九四一年から三次にわたって検挙された者は全国で三〇〇人、県内（新潟）で一六人（二五人ともいう）にのぼり、いずれも半年から一年の間留置取り調べをうけ、さらに出所後は教職から追放された。（略）一九三一年の満州事変に始まる十

五年戦争は次第に中国のほぼ全域に拡大し、日本軍の侵略は進み、国家総力戦の様相をおびるに従って、学校教育の場にも政府の号令による国民精神高揚運動が進められて、国体観念の普及徹底という掛声のもとに自由主義や民主々義的な一切の思想に対して苛酷な圧迫排撃の指導が強化されていった。しかし一方では大正デモクラシーの思想に発した自由主義的教育の一環として全国で行われた小学校での作文指導は生活つづり方教育として一九三六、七年の頃には最高頂に達していたのである。豊田正子という女生徒の書いた「綴方教室」という本がベストセラーとして世に迎えられていた。それらは進歩的な教師の指導のもとに、生徒が家庭の貧しさや家族の葛藤、社会の矛盾などにめざめて純真で素朴な生活体験を通して人間的、社会的な悩みや疑問や自覚を深めていくという人間としての成長をうながす貴重な教育的実践であったが、教育界や社会全般に推し進められる政府主導の全体主義的戦時体制の強化の立場からは一切の自由を求める政治・社会・学問・文化の動きを押えこむ非人間的な抑圧をうけなければならなかった。こうして独断的な軍部・政治家・官憲に呼応して体制化された文化人、ジャーナリズムと一般多数民衆の合唱するファシズムの波に呑みこまれて個人の良心的な叫びや理性的な行動、進歩的な一部国民の連帯活動などが反国家的な企てとして排撃されて次第に姿を消してゆき、学校教育の中にも自由主義や民主主義的な色彩の営みもほぼ消えかけていた。そこへ太平洋戦争開始という決定的な軍国主義的転落へのあがきが教育界に及び、それが一つの無残な弾圧となって全国的に起こされたのが『生活つづり方教育事件』であった。（略）」（略―引用者）（「田坂先生の受難」壮年会　土岐元春）

なお福満兼重氏（鹿商工教頭）によると磯長は田坂先生を盛りたてようとしたとのこと。（昭和六十三年六月十七日談）

4・あまりにも早かった召集について　「驥歩」の年譜を何度となく見ているうちにまだ戦雲急をつげていない段階で磯長が召集されたことに気づいた。先の生活つづり方事件のはしりやもしれぬと資料にあたっていたら「綴方教育の大衆化」という論文があった。当時の状況の中での大衆化という語の持つ意味を考えるとチェックされたのではないかと思った。確かに左翼思想を持つ者は当時召集されていたし、村の有士と意見が合わなければそれも召集されていたという副田凱馬氏の証言（昭和六十三年六月二十四日）も得た。しかも磯長は正義感が強く、常に新しいものを求めていたというし、当初はプロレタリア的発想の歌を詠んでいたという。当時の召集のシステムについて調べようとしている時、「山茶花」の桑原一（内城皆人）氏より、自分も師範卒でなかったので磯長氏の後を追う形で召集されたので思想云々ではないという話を聞いた。また磯長が戦死した九江の戦況は「漢口攻略戦」（石川達三　岩波文庫）に詳しい旨もうかがった。後日根占町の神田三男氏（「驥歩」六三Pの高崎朗の弟さんにあたる人）から師範卒業生の召集のシステムの詳しい説明文をいただいた。磯長の年譜によれば志願兵として入営しているし、師範卒でなかったゆえに召集が早かったものと、現在のところ、思われる。

5・清水小の磯長文庫について　磯長の没後、資料は清水小へ全部寄贈されたとの連絡（川辺乙巳氏――磯長夫人より）を受け清水小に問い合わせたところ、「昭和二十年七月三十日戦災により全校舎焼失」とのことで、おそらくこのとき焼失したものと思われる。

磯長家と磯長武雄

○　磯長家の先祖と磯長武雄の墓

「磯長家は、祢寝家十六代重長公が元亀三年（一五七二年）春、琉球国

に使し、同国の内状を偵察せしめたという、商人磯長和泉を先祖とし、また十七代重張公の代天正十年（一五八二年）九月、島津義久琉球入の時根占港小鷹丸船頭磯長対馬極へ左のような免状を下された。対馬は和泉の後裔であると察せられる。

朱印状

大隅国根占港小鷹丸
船頭磯長対馬極

琉球　宗印
義久書判

天正拾年九月十五日

（「根占郷土誌　上巻」二九二P）

根占町川北小字松迫2167にある磯長の墓

（きれいな花が飾ってあったが撮影のため脇においてある）

磯長家の先祖は豪商であったことが「島津氏と磯長家」（同誌二九二P～二九五P）に記されている。磯長和泉の墓所は磯長武雄の墓と前後している。

磯長武雄の墓碑銘は次のようになっている。

「陸軍歩兵軍曹　勲七等功六級」

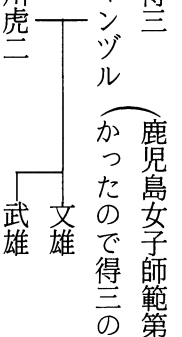
磯長武雄墓

磯長武雄君ハ明治三十四年三月三日小根占ニ生レ資性純真ニシテ名利ニ淡白ナリ大正九年東京府済美中學校ヲ卒業シ職ヲ母校神山小學校ニ奉ズ大正十年十二月一年志願兵トシテ都城歩兵第六十四聯隊ニ入隊翌年十一月豫備歩兵伍長ヲ拝命爾後引續キ教壇ニ立チ佐多神川鹿児島神山清水ノ各小學校ニ歴任ス此ノ間君ハ綴方教育ヲ潜心研究シソノ成果ハ屢鹿児島縣教育會ノ縣賞論文ニ入選シ縣下ノ綴方教育ヲ指導スルニ至リ遂ニ聲望全國斯道研究家ノ間ニ洽シ君又文藻ニ富ミ短歌ニ精進スルコト久シ偶日支事變ノ起ルニ逢ヒ昭和十三年五月應召六月　花鉢を撫しつつ思ふ大陸に驥歩をすすむる一人となりぬ　ノ詠ヲ殘シテ中支戰線ニ出征シ八月五日九江縣馬鞍山北方高地攻撃ニ決死隊二十六勇士ノ一人トシテ勇戰奮闘名譽ノ戰死ヲ遂グ壯年三十八歳家ニ父虎ニ母ツル妻乙巳一子良文アリ宮ソノ功ヲ賞シ功六級金鵄勲章ヲ賜ヒ勲七等ニ敍セラル　嗚呼君ノ如キハ文武兼備一身ヲ君國ニ捧ゲ以テ臣道ヲ完クシ衆ノ範タルモノナリ

安田尚義撰
岩下雲亭書

○「驥歩」年譜一P「大正二年、一家上京に付き東京府豊多摩郡私立日本

済美中學校へ轉校、大正八年三月　東京府豊多摩郡私立日本済美中學校卒業」の理由を神田三男氏（武雄と同一部落内の先輩と後輩の仲・実兄〈故高崎朗　昭24年没〉は磯長と同じ時期清水小に勤務）に尋ねたところ、磯長得三（立志伝中の人で東京測量社社長・大正十二年没・九州最古で全国で古い方から四番目といわれる根占書籍館の創立者）〈「根占町史談会々報」（昭和四十二年四月六日発行）に詳しい〉の養子の話があったという。「武雄養子の件は中学生時代と思われる。得三は二人の孫（文雄・武雄）にしきりに軍人になるようにすすめたが、二人は文学の道をえらんだ。得三は失望し、津崎尚武（根占町出身）代議士の長女幾子を後継者にした。」



○　磯長武雄のペンネームまたは匿名について

1・鹿児島県立図書館で「鹿兒島教育」を閲覧するうちに「縣下兒童作品の動向」（①②⑤⑥）の欄にある横手謙作という氏名が気になった。横手姓は伊集院方面にあるし、謙作という名も不思議ではないが、昭和十一年～十二年にかけて県下の綴方教育界を見渡せる人物に横手謙作なる人物はいないはずだ、そうすると誰かのペンネームではないかと思い至った。確かに副田氏に聞いてもそんな人物は居なかったという。「最近手に入れた本では、志賀直哉全集が一番嬉しく、親しみを覺えた。私は志賀さんのものは殆ど愛讀してゐたので、全集に載った作品で眼を通さぬのは『暗夜行路』の後篇位のものであるが、この全集の出てくるのを随分心待ちに待った。十一月配本になった第一巻の作品は皆明治四十年代のものであるがその生新しさに私は今更眼をみはった」（「南方片信」磯長武雄「國・語・人」五三P所収・昭和十三年）という磯長の文章中に出てくる本の主人公は時任謙作である。確証はできないが、当時県下の綴方界を見渡せる人物は磯長武雄しかいなかったことと、謙作の名からかなり高い可能性で磯長であると判断されよう。

2・「國・語・人」（昭和十四年十一月五七P）に「磯長さんの思い出」（木下壽久）という記事があり、「今その中から磯長さんの稿を抜く。（略――引用者）綴方教育時評（田住牛夫のペンネーム）」とある。副田氏に聞くと市尋校での同人誌「扉」の中でも田住牛夫（たずみうしお）のペンネームを使っていたという。「童詩教育」創刊號にもある。

3・旗振三平　磯長夫人（現・川辺乙巳氏）の弟にあたられる川辺盛幹氏が師範時代に、磯長がこのペンネームを使っていたことを覚えておられるという。川辺氏は名瀬中校長時代、飲み屋に本名で焼酎をキープしていたら部下によく飲まれてしまったので、磯長のペンネーム「旗振三平」の名でキープしたこともあるという。（昭和六十三年六月十七日談）

4・「山茶花」誌上に「山茶花人國記」という欄があり「甲南歌客　肝付三吉」（昭和九年二月號）の名がある。肝付三吉が使われたのは一回だけだが甲南歌客は以後も使われている。磯長が二中に在籍していたこと、肝付の出身で旗振三平の三と似ている三吉から磯長の可能性も高い。しかし「山茶花」主宰　安田尚義の可能性もあるので現在のところ断定はできない。

二

「山茶花」誌上の磯長武雄と賀川直子（磯長夫人）

「驥歩」の年譜によると磯長は「大正十二年太田水穂氏主宰『潮音』に作歌生活の精進をつゞける側ら同志を集め、よく歌會を開き共に楽しむ。」とある。また「昭和四年　短歌雑誌・安田尚義先生主宰『山茶花』の編輯にもたづさわり、社友と共に山茶花誌上に活躍す」とある。「昭和十一年　三四年全く歌作を中止してゐたが歌誌『山茶花』に再び出詠す」とある。

今回は「潮音」誌にはあたることはできなかったが、「山茶花」誌上の磯長と賀川直子の歌をひろいだすことができた。そこで古い方から順に記していくことにする。なお筆者が閲覧した「山茶花」は次の通りである。

創刊號（第一號・昭和二・12・15）・二・三・六・七・八・九・十一號、第二巻第一號（昭和三年十二月十五日）・二・三・四・五・六・七・八・九・一〇・一一號、第三巻二號（昭和五年二月十五日）・三・七・九・十號、第四巻第一號（昭和六年一月十五日）・二・四・五・七號〈以上はタブロイド版〉

昭和七年（一・二・三・四欠）、昭和八年（一・二・三・十二欠）、昭和九年、昭和十年（六欠）・昭和十一年、昭和十二年、昭和十三年、昭和十四年（八・一二欠）、昭和十七年（一・二・三・十一欠）

壯　丁

小根占　磯長武雄

秋潮ははや冷えびえと澄みきりてたしかに走る海底電信
フィリピン越えて來れる颱風は雷雨となりて山をゆるがす
本年壯丁檢査を受けたる教子らの同窓會に招かる
十年の月日たのもしわが前に壯丁となりて坐る人々
耕作に汗をしぼりて合理化の體驗かたる尾崎愛吉
名望家の裔に生れて階級の打破を吐露する君を肯ふ（園田正人へ）

昭和八年十月號

『群　落』讃歌

小根占　磯長武雄

隼人のさつまの國に生れたる眞玉うるはしくひびく言靈
定型を天則としてひたぶるにその精魄をかたむけし人
定型に生きの血しほ通はせて二十年なほ氣魄おとろへず
月花にあそぶ心をあき足らず新しき歌を世にうちたてぬ
全巻を貫く氣魄大いなり名も「群落」とよびて嬉しき

昭和九年一月號

腥

市　磯長武雄

大王松雨に光れる夕暗を燒場の臭ひただよひて來る
南風漁場の眞畫にはらはたのむるる臭ひを或る日いとはず
壯心のうつぼつとしてよみがへる日は來りたり春の渦潮

昭和十一年六月號

身　邊

市　磯長武雄

血をうけし家代々の獅子鼻はわが性格をここにつくりぬ
年輪をかぞへて居りて人間の齢のことに思ひ至れる

太陽の觀測をあらそふ人もゐる世の中と思ひ心くつろぐ
砲口を向けて横たふ艨艟の威力の前に頭を上げず
隆鼻術ほどこして街のハイヒール人ごみの中を颯爽とゆく
多賀山から見る停車場の界隈は家も松の木も黒く煤けをり
夏五月岩崎谷の坂の上に刀研師が刀とぎをり
時たまに母の乳房にくひ下る子は四つになり物言ひととのふ
物言ひのととのひ來り四つになる子をまん中に食臺にきはふ
日曜日デパートに行くときかぬ子をなだめすかして馬になりゐる

昭和十一年七月號

下水路

市　磯長武雄

梅雨ばれの陽はてらてらと反射して街の下水の泥をにほはす
この街の汚物をながす下水路は海につづきて遠く吐き出す
夏霞み放送局のアンテナに遠く上海の電波来てをり
廣告球街の中央の空高く押し上げられて雲とあそべる
シャッターはしづしづと降りて裏口に吐き出されくる少年店員
花賣りが朝の街にになひ來る鐵砲百合は白き香を吐く
カツフエーの女も出でて日蝕を見てゐることが何かあはれなり
生活に事を欠くわが日常に光をあたふひとり子よ汝は
一點を争ふ街の子どもらにわが教育の信をかたむく
新聞の紙面一ぱいにひろがりて手をのばしくるファッショを憎む

昭和十一年八月號

煙突

市　磯長武雄

食料品の陳列棚に青蠅が一つまぎれて畫たけにけり
海峡のトンネルを貫く逞しき決斷力は國を興すなり
梅雨ばれの底濁りゐる沖合をうねりもみ合い海豚わたらふ
煙突の上に働く人ひとり夕日の空にかがやきにけり
この街の動力となる煙突は西南方へ片よらむとす
飢かはくのどうるほす水道の水はだぶだぶと腹にたまれる
鋪装路の夕べは涼しわが靴のしめりよきほどの水撒きにけり

納涼大會三首

納涼の花火を見むと人波に揉まれて肌に汗かくわれは
揚花火夏の夜空にあいつぎてはじくたまゆらの光り涼しむ
あげ花火はかなく空に消えしとき星はしづかに光りをりけり

昭和十一年九月號

手の荒れ

市　賀川直子

拭掃除終へて座りぬ手の荒れのひりひりとして泌み入るクリーム
張り水の北の庭先の餅桶に落葉も二つ氷りつき居り
硫球の泡盛がめを床に置き松一枝に添へし葉ぼたん
思ひ思ひのこと書き寄せて初春のテニアン島へ出す手紙なり　櫻島噴火記念日
山も田もうづめ盡せる火山灰幾百人がのがれゆきたる
櫻島は名殘りの煙り上げて居り記念講話のある頃ならむ
小枕に今宵の吾子はすやすやと佛の如き顔をしてゐる
早起きの吾子にのまするマクニン錠春となりゆく笹鳴の聲

もの慣れぬ手もてしたまふ温湿布呼吸深々と感謝して寝る

昭和十二年三月號

中心地帯

市　磯長武雄

人間の高きにあそぶローマンをはづかにいやす山岳映畫
わが街に櫻島のあるは東郷の墓があるよりよしといま思ふ
新春の街は温室咲きの花鉢をショウウインドウにあしらひにけり
白ペンキ匂ふフレームに咲いてゐる花卉は西洋の感覚をもつ
この街の中心地帯南へと移りうごきて明るくなれる
洲にあがる春かげらふにたはむれて遊ぶとおもふ白き鶺鴒
水ぬるむ濠のさくらはおのづから光り立ら來て板をさし交す
松の木の枝をゆさぶり遊ぶ子は春かげらふの中にまぶしき
おのおのの位置を保ちて泊てにけり航空母艦は沖合はるか
放射するサーチライトの光茫は旅順封鎖をわれに思はしむ
民衆の環視の中を海軍は指揮官も兵も徒歩にしたがふ
鋪装路を行進して來る軍靴の音規律正しきリズムを持てる
粛軍の姿とおもふ陸戦隊黙々と我が國土を踏みゆく
粛然と行進をなす海軍に人間的なる好感をおぼゆ
武装してもなほ海軍は謙譲の態度を持てり軍人らしき
鐵冑かたく武装をととのへし陸戦隊ははがねを思はす
上海の事變を思ひ起しをり陸戦隊は目の前を過ぐ
子どもらに取りかこまれて水兵はけふの上陸をたのしめるらし

昭和十二年四月號

春雨

市　賀川直子

戸を繰れば櫻島嶺の雲のしづかなる動きにさへも春は來てをり
はてしなく流れていゆく白雲に托して捨てん今日の憂ひは
故里と思ふあたりの山脈のかすみて春はみなみより來る
ちちのみの父の情の米波止場の春雨に濡れて届きぬ
レントゲンの部屋より出でし白き顔窓の沈丁花の香にむせび泣く
病める身を寄せ合ひてゐる控室しづかに會釋して歸り來ぬ
病めばまた人の情の身に沁みておしいたゞきぬ熱き味噌汁
日當りに布團を干して床上げの眼に冴ゆる南天の紅
一月を粥に痩せたる弟の出て行く傘に春雨の降る（登校）
若き日の氣苦勞話きゝてをり陽に匂ひ咲く白梅の花
一人子を外の面の闇に泣かせてもこの強情はたたき直すべき
思ふさま布團けとばし寝る吾子の肢はかちかちと肉しまり來ぬ
石垣の彈痕經りて六十年春のすみれの花咲きてをり

昭和十二年四月號

民族の血

市　磯長武雄

花曇りただ一いろの沖合に浚渫船は泥を棄てにゆく
春泥の街の夕灯に浮き出でてやや猥らなり映畫のポスター
青物を山ほど積みしトラックに幾度あひぬ谷山街道（遠足）
南泉院馬場の木市にむらがりて草木と遊ぶけふ街人は（木市九首）
大通りうづめて庭木並べあり公園の中をいゆくがごとし
市に出てトマトの苗を一握り買ふさへたのし花曇る空
盆栽の一つ一つを眺めゆくこのしづけさは由るところ深き

盆栽の中にゆたかに花開く白牡丹ありしづかに息づく
大輪の牡丹の鉢をあがなふは分に過ぐると思ひあきらむ
丹念に枝をつくりし犬槙は大衆愛さるる庭木にあらず

大衆にひろく愛さるる盆栽は簡素なる美をいづれも持てり
盆栽をふかく愛する民族の血は古くしてすがすがしけれ
映畫館朝の鋪装路におちてゐる赤刷りのビラは踏みにじられぬ（天文館七首）
朝の靄ただよひてゐる鋪装路に紙屑のごとくビラが目につく
春の光降るがごとくにこぼれたり屋上グランドの子供と羆（ひぐま）
屋上の青空の中にアドバルーン一つあがりをり春衣を賣り出す
鳴り出づる春の新譜のレコードはこの界隈の雰囲気をつくれり
喫茶店よしやに來たる學生はコーヒー飲みてよく談じをり
夜更けまで球撞きあそぶ盛場の窓はなやかにあかりわたれる

上原伊之助先生　十一首

先生の家に通ひて朝學にはげみし中に養はれたる
親鸞の信者にましし先生は朝の念佛を先づ申されき
先生より受けし薫化はいまになほわが生活の柱となりぬ
身を似て教へ給ひし先生の感化はわれの血を流れをり
端座して教へを受けし少年のわがおもかげのまざまざと見ゆ
平凡の生涯ながら眞實に生きたることを先生に告げむ
先生の期待に添はぬ平凡の生涯ながらおのれを恥ぢず
火のごとき言葉を吐かす先生の鞭はちりぢりになりぬ幾度か
教壇に拳（こぶし）を握り説きましし先生は而も温情の人なりき
教育にたづさはり來てけふ殊にかかる先生を見るべくもなし
魂の相觸れてゆく教育にひたすらなりし先生を思ふ

昭和十二年五月號

鶯

市　賀川直子

この朝澄（あした）みて鳴く音の谷わたり合せ鏡を置きて聞き入る
ためられて素直さ見する白桃の枝を眞にぞ活けこみにけり
鐵壁の大浮城陣粛々と動きそめたるあけぼのの海
鮮人のきぬた打つ繪のしをりもてうれしき旅の來にけり
手に足に洗練され曲線美舞踊の衣かゞやくばかり
その母の心いかにと思ひつつ迷ひ子を連れて人混みに立つ
美しき人等すまして行き過ぎぬ迷ひ子を連れて交番に行く

昭和十二年五月號

圭　角

市　磯長武雄

いかほどにわが圭角を矯めにしか一途に歌は詠みつぎて來ぬ
紫雲英田にあそぶ仔牛は寸ほどの角を持ちをり毛並そろへる
柿若氣射照りかへして七面鳥あそべる庭にブリキを叩く
叩きのばすブリキの音に快感を覺ゆるわれは疲れゐるらし
丹躑躅のむらむら咲ける岩角を一直線にオートバイ來る
百姓にならむと思ひし若き日のあまへごころは我にいまなし
新しき村に入らむと思ひつめしことさへありぬ斯くて輕にけり
百姓を思ふこころはインテリの感傷に過ぎず職をまもらむ
子供服仕立てて着するやりくりの中にも妻は嬉しきごとし
夏はやもネオンの空に迷ひ出て鳴くにかあらむ時鳥のこゑ
時鳥鳴きわたる時レコードの甘たれごゑに怒りをおぼゆ

辯富を洗ひ落してゐる妻も聞かむとすらし時鳥のこゑ
はばかりもなく甘たれしレコードを鳴らす家あり蚊柱の立つ
四月二十五日齋藤文雄氏を迎へて
こゝにして二十餘年の歳月のながれを思ふ壯年われらは
昭和十二年六月號

火　星

市　磯長武雄

やや冷えて梅雨づく夜の空くらく東南方に火星が出てゐる
この地球に火星が近く見ゆる宵電車のきしりばしだに止まず
天體の正しき運行を疑はず皐月の闇にかがやく星座
人間の持てる浪曼は天體の星にうつくしき名をあたへたり
魚市場に朝の光のうごく時鮫の腸を引き裂きはじむ
製材所木を裂く音の青臭く朝の港は汐を湛へをり
から梅雨の日照りの中に立ち向ふ抵抗力を時にあやぶむ
梅雨づきて裏の下水の泥臭くにほふわが家の疊に座りゐる
バスケット下げし一人の少年がから梅雨の日の街をいゆけり
○
民衆をかへり見るなき一個人の獨善主義は憎みたほすべき
神憑りに似たる言葉をあげつらふ獨善主義はわれを怒らす
新聞を見てまたけふも慣りをさへかねをり梅雨にいる時
昭和十二年七月號

病　友

市　磯長武雄

板塀に朝顔の蔓からゐる宵の路次口は足もと暗し
やうやくに訪ねあてたる家の中にすでに三月を寐てゐき友は
體温器枕邊におきて横たはる寐莫座はすでに擦りつぶれ居り
よく見れば流石に肉附おとろへて太き骨組が眼にいたいたし
病状を寐ながらかたりゆく友に受けこたへする言葉つつしむ
路次奥に百日あまり病み臥して逐に退職を思ひつめにけり
退職と思ひきめしはよくよくのことなり七人の家族をかかゆ
ここに來て不幸次々におこりたり家相のこともたづねしといふ
家族のこと案じて友は澁れども轉地療養をすすむる外なし
水枕横たはり臥す顔上げてまた來てくれと二度までいひぬ
○
昆蟲の世界の中に愛情のしみとほりゆく童話を聴かす
人心の透徹を欠ぐ世に生きてわが歌のみは本音を吐かむ
わが肉體をしづませてゐる朝風呂はタイルなめらかに湯をこぼしゐる
のびのびと湯壺にしづみゐる時の朝の生理はひとりを欲す
トーキーの映畫の中によく透る金属性の會話をたのしむ
昭和十二年八月號

空　谷

市　磯長武雄

ローラーの動くがごとくわが軍の集團力はあますところなき
上海の市街に向けし砲口は射角さだまりて大陸を壓す
十字路に土嚢をつきて閃々と機銃火を吐く上海の畫
肉弾となりて死にゆく將兵はいく人か知らず軍は全し
墜落の機上ひらひらハンカチをうち振りにけり最後となりぬ（梅林中尉）
果敢なる敵前上陸は民族の血のたぎりなり白襷隊
城門に眼を凝らす監視兵に闇は深々と兵弐をおさむ

戰勝の聲よ空谷にこだまして日は落ちゆけり萬里の長城
秋闌けて棗のみのる戰場に憩ふ兵士をカメラに入れぬ（戰時寫眞）
この世界に黄色支那の存在を好餌のごとく見る國なきか

○

屋上のテントの中に監視兵立ちつくしをり秋の空の雲
動亂の中に季節のおのづからうつりゆきつゝ萩の花咲きぬ

昭和十二年九月號

甘露

市　磯長武雄

戰場の水は甘露のごとしといふ故國の秋はやうやく闌けぬ
戰はうつくしきかも江南の空いういうとかへる編隊機（南京空爆）
戰線に荷役となりて働ける特務兵はみな前かがみなり
戰のことにとらはれてゐるわれか聯想をよぶ土手の彼岸花
ふる里に遺骨となりてかへり來ぬ彼岸花咲く眞晝の堵列
成吉思汗の血は湧き立つか蒙古族朔北の野を剽悍にゆく
月あかり天水桶にうつりをり秋の氣温を舗道に感ず
モートルの唸りはたはた街なかの雜音を消してしづかに暮れぬ
街なかの物干臺に秋の日はしみらに照りて白布かはける
街なかの物干臺にはたはたと風ながれをり空の鱗雲

昭和十三年十月號

秋の山

市　賀川直子

むきて食ふみかんもうまし秋の山つはぶきの花に蜂うなりつつ
人知れず咲きて山路にしぼむ花秋の夕陽に生甲斐を思ふ
杉葉拾ひ終へし山路の芝草に蔕苦勞の手をくらべあふ
秋深き山の芝草照らす陽よ泣き笑ひつつゝなぐさめあへる
水仙の花咲く背戸に水沒みの車きしりて夜は明くるらし
水仙の花咲くことも書き添へて久になつかしみ文たまへる（母）
ぜにごけはいよいよ蒼く庭隅の石おほひぬ初霜の朝
うつせみの世のこだはりにつかれたる眼をとぢて水仙を嗅ぐ

昭和十二年十二月號

市　磯長武雄

パラシュートに似てぽっかりと噴煙は白く上りをり秋の櫻島
八衝をなだれていゆく人ごみの中に聞きたり金庫のあく音
地下室の電燭の中に水仙は冴え冴えとして水をあげをり
丸之内朝あけがたのビル街にほうり出されし如く佇む
東京の三日の間タクシーに乘りし回数を不圖思ひをり
地下室の晝のあかりは不圖われに卵の殼を思ひ出さしむ
のびのびと湯壺にしづみゐる時の朝の生理はひとりを欲す
干物をたたみて縁に揃へたる静かさはけふの心にふれぬ
騒然と電車とほりし時の間もガードの下に豆腐揚げをり
たまに來て街の波止場の雰圍氣に蹴おされんとするわれを憤る

昭和十三年二月號

市　賀川直子

拭掃除終へて座りぬ手の荒れのひりひりとして沁み入るクリーム
早起きの吾子にのまするマクニン錠春となりゆく笹鳴の聲
思ふさま布團けとばし寝る吾子の肢はかちかちと肉しまり來ぬ
蝶二つ指にはさみて歸り來ぬ息はづませてうれしさをいふ

ゴム靴の匂ひ沁みたる子の足を洗ひやりつゝこほろぎをきく
鐵かぶとうれしき吾子を遊ばせて菊もかがやく屋上庭園
夢にさへたのしき遊びあるならむ聲たてゝ笑ふ一人子を持つ
錢渡すその掌に觸れあひしぬくみ粗々し青年となる（弟）
ひかれゆきて遠くに馬が嘶きし一聲なればいらだちにつつ
徴發馬貨車につまれて過ぎしとき街は日履を垂れてことなき
ひとときをとかげは眼うるむなれあはれ上海は考えへざらむ

昭和十三年二月號

牡丹

市　賀川直子

離りゐて父を慰めはげましつ善き子の文に哭きたまひけむ
濱千鳥啼く夜をひとり愁郷にさみしき君と想ひまゐらす
いかばかり逢ひたかりけむ故里の妻子に寄せしみ歌にぞ泣く
かたむけし吾子が小傘に散りかゝる名残ざくらは白くさびしき
去年の春買いし洋服つんつんと着てかけ廻る兵隊ごっこ
レコードのリズムに合はせタクトとる術も覺えし子を抱きしむ
タクト棒うち振りにつつ感覺の澄むまなざしのひかりおそるる
産み立ての卵握りて母呼ばふ鶏舎の土手の野茨の花
日もすがら櫻島嶺も見えぬ黄塵のざらつく縁を夕べ浄むる
春蒔の花も野菜もまき終へし夕べの雨につばくらの飛ぶ
眞白き花びらちらとほぐれくる朝の光りに牡丹愛でます
酒煙草たしなみまさぬわがひとに牡丹は白くほころびにけり
隣り家もわが家も高く衣干しぬ白き牡丹に畫の茶を呑む

昭和十三年六月號

出征

市　賀川直子

大君にささげまつりしみ命ぞ心をきなく征かせわが夫

武雄返歌　六月六日門司より

花鉢を撫しつつ思ふ大陸に驥歩をすゝむる一人となりぬ
一人子の頭かゐなでさとしつゝ熱きわかれを夫のしたまふ（繹頭の別れ）
いさぎよく笑みて一期の別れしぬ歡呼のなかに子を抱き上ぐ
一瞬間かち合ひし瞳よその熱きひかりに答へうなづき申しぬ
汽車窓に笑みて手振りて征きましぬ戰は今たけなはとなる
身にしみて一期の別れ申したりたゞ一人子を抱きて旗振る
汝が父の性格うけて育ちゆけ天にも地にも一人となる吾子

陣中便り

男の子われ難行軍を征服すと文字ににじみし苦勞に哭きぬ
戰地より子にかけ給ふ愛情のあはれに沁みて強く育てむ
初給料吾子が夏服買へよとて便りにそへて今日は届きぬ（七月十一日）
よろこびて開きたまはむ日は何日ぞ慰問袋にこむる眞心
暁の宮の靜寂に澄む拍手ひたすらに熱き祈りさゝぐる
宮籠り一睡もせぬこの熱き祈りを夫に届かしめたまへ
まなぶたに焼きついてゐる面かげよ吾子と朝夜の宮詣りする
月澄める夜空かけりてゆく想ひ露營の夢に吾子と逢ひませ
吾子つれて今日ついたちの宮詣り青田のとんぼ追ひつゝゆきぬ
應召旗古りてはためく秋風の夕べの庭にこほろぎをきく
汝が父もかく戰ひてゐまさむと寫眞のニュースを子とのぞき見ゆ

昭和十三年十月號

ふるさと

小根占　賀川直子

感傷はかなぐりすてゝいざ起たむ青葉もりあがるふるさとの山
男の子ひとり頼みにおもふものありてわが半生の光明となる
再びははくこともなしと思ひしを紺の袴はなつかしく寂し
今日よりは夫に代りて出動の母なり吾子が門に見送る
まがり角ふりかへり見れば手まねきて何やら言ひし白きエプロン
新任のことばにこむるわが決意さくら若葉に春あらし吹く
たそがれは母の戀しき吾子ならむよごれしエプロン想ひつゝかへる
母われの歸りはかくもうれしきかとびついて來て辨當をもつ
思ひ出の花咲く庭の明るさに蝶々を追ひて吾子はあそべる
圖書室の本のレッテルにのこりゐる文字さへかなしひとり整理す
この窓にともと集ひて道のためひたむきなりしひとなりしものを
在りし日のみ姿のまゝ華かげに朝夕のわれを勵ましたふ（寫真）
母われをいたはりくるゝ幼子のをさなしぐさに想ひきはまる
すやすやと父の寫眞に向きて寢る黒きまつげをかなしみにけり
別れはてゝはや一年となりにけり青葉がくれのうぐひすのこゑ

昭和十四年八月號

三

磯長武雄編集文集・編集本・執筆論文等

※は未見

一、・「我等の學園」（市尋校）

昭和7年〜昭和11年の間の磯長の住まい
〔根占町浜馬場〕
当時とほとんど変わっていないという
（神田三男氏談）

・學校文集「城」神山尋高小　昭和九年
・學校詩文集「青空」神山尋高小　昭和十年四月以前
・學級詩集「塔」神山尋高小　昭和十年
・學級文集「鐵」神山尋高小　昭和十年
・學校文集「城」神山尋高小　昭和十年
・學校詩文集「清水」清水尋常小　昭和十一年
・學校詩文集「清水　Ⅵ」清水尋常小　昭和十二年七月
・學校詩文集「しみづ」清水尋常小下學年詩文集9　昭和十三年七月
・學校詩文集「清水」清水尋常小上學年詩文集9　昭和十三年七月

※・學級詩集「月夜の貝殼」　昭和九年以前
（「驥歩」九〇P）

※・童話集「つばさ」

二、「綴方地區　3　七月」昭和十年七月
「綴方通信　創刊第一號」昭和十二年三月
「昭和十二年度版　年刊鹿児島児童詩文集」昭和十三年
「昭和十三年度版　年刊鹿児島児童詩文集」昭和十四年

・「童詩教育」
創刊號　昭和七年四月
第一巻第二號　昭和七年五月
第一巻第四號　昭和七年七月
第二巻第二號　昭和八年十一月
第二巻第三號　昭和八年十二月

三、

・「初ざくら研究」（「山茶花」昭和四年　二月號　第二巻第三號）
・「初ざくら研究」（「山茶花」昭和四年　三月號　第二巻第四號）
・「兒童自由詩を認めよ」（「鹿兒島教育」昭和四年七月號）
・「プロレタリア文學としての短歌」（「鹿兒島教育」昭和四年十月號）

※

・研究録「私の綴方教育大道」（昭和六年・日本綴方教育研究會展覧會）
・「巻頭言」（「童詩教育」（昭和七年四・五・六・七月第一巻創刊號
—第四號）
・「現代歌人研究—与謝野晶子—」（「山茶花」　昭和八年四月號）
・「短歌の積極性」（「山茶花」昭和八年十月號）
・「現代歌人小觀　吉植庄亮」（「山茶花」昭和八年十月號）
・「短歌の積極性（承前）」（「山茶花」昭和八年十一月號）
・「現代歌人小觀　吉井　勇」（「山茶花」昭和八年十一月號）
・「作品をどう處理するか」（「童詩教育」十月號—昭和八年十一月）
・「詩話教育の再提唱」（「童詩教育」十二月號　昭和八年十二月）
・「詩話の系統案」（「童詩教育」十二月號　昭和八年十二月）
・「現代歌人小觀」（「山茶花」昭和九年二月號）
・「現代歌人小觀」（「山茶花」昭和九年三月號）
・「應募作品の指導をどうするか」（「鹿兒島教育」昭和九年十一月號）
・「兒童詩教育の精神」（「新童詩理論とその實践工作」東苑書房　所収）
・「綴方教室設營の一面」（「綴方地區　一號」昭和十年三月）
・「兒童詩とマンネリズム」（「綴方地區　一號」昭和十年三月）
・「兒童の『仕事』の綴方的考察」（「綴方地區　二號」昭和十年五月）
・「都會兒童詩から摂取するもの」（「綴方地區　二號」昭和十年五月）
・「綴方教育の大衆化」（「綴方地區　三號」昭和十年七月）
・「兒童詩の研究」（「綴方地區　三號」昭和十年七月）
・「兒童文の研究」（「綴方地區　三號」昭和十年七月）
・「兒童散文詩是非」（「北見文選」昭和十一年五月）
・「短歌の時代性」（「山茶花」昭和十一年七月號）
・「短歌と教養」（「山茶花」昭和十一年十二月號）

※

「　　」（「綴方教育實踐叢書八巻」昭和十一年東苑書房
・「作歌の根據」（「山茶花」昭和十二年三月號）
・「大衆化の實際」（「綴方通信」創刊號昭和十二年三月）
・「新人論」（「山茶花」昭和十二年四月號）
・「短歌に於ける知性」（「山茶花」昭和十二年五月號）
・「新連作論」（「山茶花」昭和十二年六月號）
・「調べの展開」（「山茶花」昭和十二年七月號）
・「短歌と浪曼精神」（「山茶花」昭和十二年八月）
・「戰爭と短歌」（「山茶花」昭和十二年九月）
・「女性の歌」（「山茶花」昭和十二年十月）

・「山茶花―磯長武雄追悼號―」（第十一巻第十二號　昭和十三年十二月號）

○追加

・「綴方實踐の開拓―畏友木村壽君の近業に就て」（「鹿兒島教育」昭和九年十一月）
・「綴方實踐の大衆化」（「綴方教程」昭和十三年）
・「方言驅使の限界」（「綴方教程」昭和十三年）
・「文學者の見た兒童文への感想」（「綴方教程」昭和十三年）
・「綴方理論の大衆性」（「綴方教程」昭和十三年）
・「文集の編輯技術」（「綴方教程」昭和十三年）
・「兒童詩に於ける方言駆使の限界」（「工程」一九三五・六・第一巻第三號）
・「モラルを持つ兒童文の考察」（「工程」一九三五・七・第一巻第四號）
・「文学者の観た兒童文への感想」（「工程」一九三五・八・第一巻第五號）
・「綴方實踐の大衆化運動とその方策」（「工程」一九三六・九・第二巻第九號）
・「都會的特質」（「綴方教育」第五巻第四號）
・「詩を作らせることに就て質す」（綴方教育」第六巻第一號）
・「第四回誌上展覧会を讀んで」（「綴方教育」第六巻第九號）
・「文集編輯と其の活用」（「綴方教育」第六巻第十二號）
・「綴方教授細目の研究」（「綴方教育」第九巻第九號）
・「全然自分の創意の依った」（「綴方教育」第九巻一〇月号）
・「月一回の清書」（「綴方教育」第九巻十月號）
・「各自の文詩集を自發的に」（「綴方教育」第九巻十一月號）
・「普通の讀方帳を代用」（「綴方教育」第九巻十二月號）
・「確信はない」（「綴方教育」第十巻一月號）
・「經験を語る」（「綴方學校」第二巻第七號）

※　「兒童自由詩集」アルス
　　磯長武雄の指導した詩が二つある

出典のうち「鹿兒島教育」（鹿兒島縣教育會）県立図書館収蔵本
・大正四年十一月號・大正六年年五・六・七・八・九・一〇・十二月號・大正七年一・二・三月號・大正十四年七・八・九・十・十一・十二月號・大正十五年一・二・四・六・八・十・十二月號・昭和二年一・五・六月號
・昭和三年全・昭和四年全・昭和五年一・二・三・四・五・六月號・昭和七年全・昭和八年全・昭和九年全・昭和十年全・昭和十一年全・昭和十二年全・昭和十三年全・昭和十四年全・昭和十五年全・
（田之上新吉・田坂誠喜等の論文も散見される。）
※この項では雑誌評記事や誌上座談会の類は省いた。

四

「驥歩」中の人名と消息

氏名	住所
千葉春雄	
百田宗治	
安田尚義	
吉田瑞穂	
木林寿	
角虎夫	
佐々井秀緒	
稲村謙一	
松本正勝	
池田和夫	
坂本礒聰	
山本英哉	
田坂誠喜	(故人)〒一八〇　武蔵野市西久保三―八―一六　シャトークスモト二〇八（田坂重子）
高崎朗	(故人)弟……神田三男　（根占町在）
村山栄	
竹野良夫	
副田凱馬	(故人)〒八九〇　鹿児島市薬師一丁目一九―七三　TEL　五四―八五二三
木下寿久	
平田一男	〒八九〇　鹿児島市宇宿二四六九　TEL　六四―五八三八
出水田静雄	
山下源蔵	〒一五五　世田谷区代田一の三一の四　（〇三）―四一一―一九八七
田代徹也	〒八九八　枕崎市東鹿篭一三八一三
吉嶺勉	(故人)〈吉嶺フミ〉〒八九一―〇一　鹿児島市桜ケ丘二―二三―六
内田貢	〒八九〇　鹿児島市草牟田二―三三―一八　TEL　二二―九五五一
橋口正則	〒八九三　鹿屋市寿五―二七―一五
富永栄蔵	〒八九一―〇一　鹿児島市和田一〇五一―一　TEL　六八―五六七四
八木矢三郎	(入院中)〒八九〇　鹿児島市田上町一〇三六　TEL　五一―四四八二
黒川肇	(入院中)〒八九〇　鹿児島市紫原四―一八―一九　TEL　五五―一五〇六
日高千賀志	
寺園司	
内田敬造	(故人)〒八九一―〇一　鹿児島市下福元町九五〇五　TEL　六一―三五七三
大井文四郎	
上野清俊	
西武臣	
福満兼重	〒八九〇　鹿児島市鴨池一―四二―二　TEL　五五―六五六八

柳田善之助
三浦安雄
石澤藤盛
入佐正義（故人）
石田秀雄　元鹿屋市教育長（昭和四〇年代）
江口三郎
濱崎誠一
北山幸郎
西原三代志　〒八九一―〇一　鹿児島市五ケ別府三七九七―二八　TEL　六五―六五二四
枝迫實一
坂田耕四郎　三井生命社長
磯長乙己（現・川辺乙己）　〒八九三　鹿屋市寿三丁目十―五磯長方

五

磯長の指導と思われる作品と作者名

「春嵐」　尋六　神山校　中島イツ子
「煙草のとこ」　高一　神山校　小岩スミ子
「御飯焚」　高一　神山校　徳留ハツエ
「日なたぼっこ」　尋三　神山校　平瀬戸榮
「水でっぽう」　神山校　高崎博文
「子守」　尋三　神山校　後迫福彌
「水でっぽう」　尋三　神山校　池之迫三郎
「川口」　尋五　神山校　指宿竹二
「今に見ろ」　高一　鹿児島校　山口蕃
「ドッグの人」　尋六　鹿児島校　松崎藤四郎
「兒童詩の理論とその展開」（「綴方倶楽部　臨時號」所収　昭和九年五月）
「雄川瀧」　尋四　神山　平瀬戸美好
「兒童詩に於ける方言駆使の限界」（「工程」一巻三號　所収　昭和十年）
「兄弟げんぐわ」　尋五　神山　笹貫三郎
「モラルを持つ兒童文の考察」（「工程」一巻四號　所収　昭和十年）
「ふん水」　尋二　鹿兒島校　古里正義
「蟲賣り」　尋五　鹿児島校　末吉正二
「タンク」　尋六　鹿児島校　藤崎藤四郎
「夜」　尋六　鹿児島校　北野重則
「街」　尋六　鹿児島校　藤井憲一
「街の子供の詩」（「綴り方倶楽部」昭和十年二月號）
「月夜」　神山校　通山多喜男
「馬草切り」　尋四　神山校　下之角正己
「最近兒童詩の表現傾向」（「國・語・人」昭和十年六月）
「イカツリ」　尋一　平瀬新一郎
「山」　尋一　ウシロザコヤスコ
「キザノボリ」　尋一　堂園誠一

「ネコ」　尋一　スルカキヨテル
「ツジダケ」　イソモトノブコ
「月」　尋一　上ノソントラヲ
「山」　尋一　ムラオカケンゾウ
「ニチヤウビ」　尋一　寺ダヒミコ
「ツジダケ」　尋一　キヒタノリコ
「ウグイス」　尋一　タヌキヒサキ
「ウサギ」　尋一　ナカムラタモツ

「死んだ三郎」　尋二　妹尾郁夫
「山」　尋二　外園一夫
「けさ」　尋二　岩倉ムツコ
「るすばん」　尋二　坂田耕四郎
「おとうさん」　尋二　吉村政子
「山」　尋二　町田芳子
「山道」　尋二　坂田耕四郎
「夜」　尋二　谷川三善
「寒い日」　尋二　永松實

「やきゅう遊び」　尋三　高崎能邦
「兄さん」　尋三　岩松光子
「春の夕方」　尋三　三浦泰治
「夕方の山」　尋三　池端普治郎
「富士山」　尋三　後迫澄子
「おみやげ」　尋三　井ノ上トヨ子
「月夜の庭」　尋三　西園三代子

「さつちゃん」　尋三　後迫スミ子
「べんきやう日」　尋三　有馬久子

「頭つみ」　尋四　郷司山竹二
「お母さんに」　尋四　通山多喜男
「妹」　尋四　宇都精二
「新しい教室」　尋四　宇都鉄男
「なん船」　尋四　笹貫三郎
「寒櫻」　尋四　平野芳男
「お父さん」　尋四　下之角正己
「鶏」　尋四　池之迫三郎
「雄川瀧」　尋四　平瀬戸美好
「一日の學校生活」　尋四　花木エシ
「一年生」　松下道治
「たこ上げ」　尋四　通山多喜男

「夜の雨」　尋五　小牧貞三
「馬」　尋五　高崎治子
「虹のかゝった山」　尋五　鞍掛頼子
「竹山」　尋五　堀之北重成
「たかなの芽」　尋五　岩下久男
「寒い朝」　尋五　西原フクエ
「四十がらの觀察」　尋五　中島初男
「目白」　尋五　岩松正治
「すいせんの花」　尋五　相川澄男
「霜」　尋五　北之口作次

「田圃道」　尋五　金井エツ
「ドッヂボール」　尋五　鞍掛頼子
「山道」　尋六　坂田瑞男
「飛行機」　尋六　北山一雄
「霜の朝」　尋六　北山一雄
「月夜」　尋六　川原千恵子
「唐芋あげ」　尋六　瀬脇一
「ぢんちょの花」　尋六　持晋クサ子
「草刈り」　尋六　技迫甚志
「芽の力」　尋六　持晋クサ子
「模合の集金」　尋六　岩倉リキ子
「霜の朝」　高一　藤久保精二
「杉山」　高一　平瀬戸サエ
「開聞嶽」　高一　藤久保清二
「馬の腹いたみ」　高一　藤久保清二
「夜廻り」　高一　愛甲ユリ子
「笠毛さんへ」　高一　西原トミ子
「唐芋打」　高一　大村哲夫
「朝の濱」　高一　西原トミ子
「高牧山」　高二　谷口勝雄
「雨の降る日」　高二　牧瀬カツ子
「卒業」　高二　徳留ハツエ
「月夜」　高二　上之浦信子
「辻岳の頂上」　高二　徳留ハツエ
「水汲み」　高二　神田昌利
「健兒團について」　高二　谷口勝雄
「霜の朝」　高二　中島イツ子
「家事實習」　高二　徳留ハツエ

「城・しろ・シロ」昭和十年四月　第一巻第一號

「おそろしかったこと」　尋二　松山カヨ子
「いねこぎ」　尋三　港原時雄
「こうずゐ」　尋四　原口潤一郎
「みかんちぎり」　尋六　貫見スミ
「荷積み」　尋六　西原三代志
「鵜戸神社参拝」　尋六　北山幸郎
「磯長先生を偲ぶ」　高二　内元タミ子
「磯長先生」　高二　上古殿サヨ

「昭和十三年度版」

「ヤギ」　尋一　タカザキヨシノリ
「コッペンハゲ」　尋一　サカタコウシロウ
「ざぶとんと僕のじゅうどう」　尋三　坂田耕四郎
「れんげさう」　尋四　平野芳男
「麥ふみ」　尋四　通山多喜男
「かわら」　尋二　堀スミ子
「夕方の山」　尋二　池端普治郎
「新しい教室」　尋四　宇都鐵男
「算術の時間」　尋五　川井田フミエ

「ごはんつぶの神様」　尋四　津崎典子

「鑑賞兒童詩文選」（昭和十二年）

「さむい朝」　尋二　清水校　深川佐津子

「僕の宝」　尋四　清水校　原田秋穂

「全日本子供の文章」（昭和十二年）

「うみ」　尋三　神山校　宇都清晃

「兵隊さんの見送り」　尋三　神山校　徳留トヨ子

「一本松」　尋三　神山校　飯森秀男

「空襲警報」　尋三　神山校　長野ヒロ子

「製材所」　尋五　神山校　西原三代志

「縄はえ」　尋五　神山校　中島次雄

「魚釣り」　尋五　神山校　坂田耕四郎

「鷹渡り」　高一　神山校　池之迫三郎

「鯵釣り」　高一　神山校　寺田吉徳

「煙草の施肥」　高二　神山校　持留クサ子

「暖い日」　高二　神山校　岩倉リキ

「昭和十三年度版　年刊　鹿児島兒童詩文集」

おわりに

磯長武雄研究の観点として「はじめに」にあげたことが今後の追究すべき課題である。

できるだけたくさんの資料を比較検討しなければ短絡的な結論になる可能性もある。磯長の生きていた昭和初年代は日本全国交換文集はなやかなりし頃で、これまで得た資料から、磯長の新資料が発見できそうなところは島根県・東北地方・北海道である。

今回の作業は史実の正確な記述に主体をおいたが、若干の発見もあったので、それを折りこんで記した。

なお本稿執筆にあたり資料提供や、貴重な証言をしていただいたり、便宜をはかっていただいた方は次の通りである。記して感謝の意を表した い。

山下源蔵・副田凱馬・橋口正則・川辺盛幹・川辺乙己・福満兼重・神田三男・東田喜隆・蔵満規司男・桑原一・滑川道夫・倉沢栄吉

（本稿執筆中の昭和六十三年十月八日副田凱馬氏が急逝された。「我等の學園」の調査以来、幾度も貴重な資料提供や証言をいただいた。謹んで哀悼の意を表する次第である。）

注　拙稿「これからの国語教育に望むもの――小学校教師としての国語教師論」（鹿児島国語教育　第37号」昭和五十六年度　所収）に於いて、小学校教師はすべて国語の教師である・小学校教師は全教科の教師であるの二点を強調した。